

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520902

研究課題名(和文)石干見の文化資源としての位置づけとそれをめぐる国際的研究ネットワークの構築

研究課題名(英文) Study of stone tidal weirs as cultural resource and construction of international study network of stone tidal weir

研究代表者

田和 正孝 (TAWA, Masataka)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：30217210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：伝統的な石干見漁法が、近年、地域貢献やツーリズムのための装置として脚光を浴びてきている。本研究では、東アジアやヨーロッパ、太平洋地域の石干見をめぐって繰り広げられる伝統的な漁業の見直しや、沿岸域の環境保全、環境教育などを比較研究するとともに、石干見をめぐり研究ネットワークの構築を進めた。その結果、東アジア、特に台湾の澎湖列島の石干見漁業に関する歴史的な把握、石干見の名称をめぐり歴史的な問題、特定地域における石干見に関するデータベース化の試み、石干見の保存・再生・活用をめぐり議論、国内外の石干見研究者・保護団体とのネットワークづくりに一定の成果を修めた。

研究成果の概要(英文)：Stone tidal weirs are traditional fixed stone traps that are constructed on seaward slopes. They have become outdated, and very few remain today. Two ideas worth considering are preserving the stone tidal weirs, as local cultural assets and utilizing them as tourist attractions in recent years. I discussed the problems about how to make efficient of stone tidal weirs as cultural and historical heritages, symbols of marine resource management and tools for environmental education in East Asia, Europe and the Pacific Resions.

I achieved many results of the historical analysis of the stone tidal weirs of Penghu Island in Taiwan and built the database of them in each local area. I also built national and international networks of associations preserving stone tidalweirs in Kyushu in Japan, Taiwan, and France.

研究分野：漁業文化地理学

キーワード：石干見 文化遺産化 環境保全 研究ネットワーク 地域貢献 ツーリズム

### 1. 研究開始当初の背景

石干見は、潮汐の変化を巧みに利用して魚群を獲得する、石を積んで構築された大型の陥穽漁具である。かつて世界に広く分布していたが、漁船漁業の発達や沿岸部の開発によって多くは消滅した。しかし、近年、各地に依然として残されている石干見は、伝統的な漁具としての価値に加え、地域おこしの道具やツーリズムの装置として、また沿岸の文化遺産として脚光を浴びている。石積みにも生物が蟄集し、結果として生物多様性がはぐくまれるといった考え、石干見が住民に海に親しむ機会を与える文化資源であるという考えがその背後にある。さらにはいわゆる satoumi (里海)文化の定着とその拡大も背景にあるといえるだろう。このような社会や学界の動向をふまえる時、石干見をめぐる繰り広げられる伝統漁業の見直しや、沿岸域の環境保全、環境教育の中で果たされる役割などについて比較研究する必要があるとの認識にたった。

### 2. 研究の目的

石干見研究の可能性と課題は、石干見研究の史的展開、石干見の名称をめぐる問題、石干見に関するデータベースの作成、石干見漁業活動の調査、石干見の保存・再生・活用をめぐる議論、の5つに分けることができると考えている。本研究では、これら全体、特に～を俯瞰しながら、文化資源としての石干見について、基礎的な情報を蓄積することが目的の一つとなる。また、が、近年見出されるようになった議論と研究課題である。地域資源をいかに守り、維持し、活用するかについての議論であり、そこに様々なアクターが介在している。これらを分析することは、地理学者が地域貢献をまなざす時に避けては通れない重要課題である。本研究では、日本国内のみならず国際的に見て石干見を保存・活用している地域の保護団体と密接なネットワークを構築することも大きな目的のひとつである。アカデミズムの研究成果をいかにして、また何を地域の人々に還元すればよいか、地域の人々を交えて討論することも目的に加わる。

### 3. 研究の方法

#### 1) 石干見の文化資源としての理解を深めるための基礎研究

研究代表者は、主として日本、台湾など東アジア地域において石干見漁具に関する調査を実施している。それらの調査によって得た資料類から、各地の石干見漁業の過去の状況や現在の状況を明らかにする。また、地域を限定しながら、諸記録、自治体史などを収集したうえで、特定地域の石干見データベースを作成する。

#### 2) 情報交換とネットワークづくり

不定期ではあるが継続して開催される石干

見サミットにおいて、各地域の情報を得るとともに、地域が求める「地理学的な知」について検討する。また、石干見を有する地域のネットワークづくりには何が必要であるのかを考える。場合によっては、サミットの開催にいたる過程についても関わりを持ちながら、石干見による地域づくりについて考察する。さらに、台湾やフランスでの石干見の保全と活用について、研究者ならびに石干見を保全する諸団体と情報交換する。

### 4. 研究成果

#### 1) 石干見の文化資源としての理解を深めるための基礎研究

台湾には伝統的な定置漁具石滬(チューホーあるいはスーフー)が数多く存在している。石滬は本島北西部の淡水から苗栗までの海岸線および台湾海峡に位置する澎湖列島に分布していた。台湾本島では、淡水の沙崙に復元された石滬が数基、苗栗県後龍鎮外埔に漁具としての機能を有しつつ文化財として保存されているものが2基残っている。他方、澎湖列島全域では2010年3月現在、590基の存在が確認され、このうちの約150基において魚とりが続けられている。

ところで、国史館台湾文献館(旧台湾文献委員会)が所蔵する台湾総督府文書の中に、1914年(大正3年)の澎湖列島および1915年(大正4年)の台北庁芝蘭と新竹庁苗栗の石滬漁業権免許申請書類が残されている。いずれも当時の石滬漁業を理解するうえで貴重な史料である。台湾の漁業地理学者および研究代表者は、これらの一部を用いて澎湖列島と台北庁芝蘭沙崙仔における石滬の利用形態についてすでに考察を試みたことがある。その結果、台湾における石滬漁業の位置づけが明確にされ、ひいては東アジアの石干見文化がより鮮明となってきている。しかし当時の石滬漁業については依然として不明な点も多く、この点からみれば近代期の史料をさらに検討しながら、石滬漁業についての研究を続けなければならない。

以上のような研究状況をふまえて、これまでの石滬の研究を回顧し、石滬に対する現代的な意味づけについてみたうえで、石滬が集中して存在した淡水の芝蘭沙崙、苗栗県後龍鎮外埔、澎湖列島北部の3地域をとりあげ、1910年代の漁業権免許申請書類に依拠しながら、当時の石滬の漁場利用形態と所有形態について考察した。

その結果、石滬が共同で構築され、その後所有権は親族を中心に継承される形態や、個人が石滬を買収することによって所有権が特定の者に集中する形態、ほとんどの所有者が関わる石滬の数が1滬に保たれており、いわば郷全体で石滬利用が平等になされているといえるもの、一人がかなり多くの石滬に持分を有しているような形態など、様々な所有形態がみられた。

## 2) 石干見のデータベース構築

石干見のデータベースについてみると、日本ではまとまった成果は提出されていない。そこで、沖縄地方の石干見についてデータベースの構築が可能かどうか、情報の収集と整理を進めた。

沖縄列島、八重山諸島では、イノー（ラグーン：礁池）が発達した海岸部にはかつて多数の石干見が構築されていた。しかしその正確な数や実態はわかっていない。これらが日々の「おかずとり」のための装置、あるいは「あそび」の空間として利用されてきたことや、定置される漁具として関係諸機関に漁業権が申請されなかったこととが関係しているであろう。

沖縄地方の石干見に関するまとまった調査研究としては、1960年代から70年代にかけて実施された西村朝日太郎とその門下生による宮古島、八重山諸島小浜島における研究、1990年代にコモンズ研究の一環としておこなわれた石垣島白保における研究、西表島東部の石干見の痕跡についての調査など、数は少ない。石干見が注目されているとはいえ、その基礎研究はいまだ十分におこなわれていない状況である。そこで、こうした基礎研究のひとつとして、沖縄地方（鹿児島県の離島部を含む）全域で見られた石干見のかつての状況を明らかにしたいと考えた。上記のまとまった諸研究とともに各地の市町村誌（史）の漁業や民俗に関わる項にある石干見の記述を中心に、一部にこれまで研究代表者自身が進めてきた聞き取り調査によって得たデータを含め、沖縄地方における石干見のデータベース作りを進めた。

なお、石干見の記述は個別の研究論文から、数行の紹介文まで精粗が極めて大きい。ここでは各地における情報の蓄積量を問うことが目的ではないので、地域ごとに記述する方法ではなく、石干見の呼称、構造、所有形態、に分類し、整理したい。本研究は、未発表である。いずれ早い機会に公表することを考えている。

## 3) 石干見研究ネットワークの構築と石干見サミット

石干見サミットは、日本各地および世界のいくつかの地域において同時発生的にみられた「石干見の再生や活用に関する取り組み」が契機となって開催されたものである。2008年に大分県宇佐市長洲にて開催され、翌2009年には長崎県五島市富江町、2010年には「世界海垣サミット in 白保」と題して、沖縄県石垣市白保、第4回は2013年に鹿児島県奄美市にて開催された。

研究代表者は第1回からこのサミットに参加し、石干見の保存と再生、さらには活用に関する報告を続けている。その目的は、石干見に関して多くの地域が基礎的な情報を共有し、さらにはそうした情報を交換で

きるネットワークづくりを推進してゆくことであった。2013年3月に開催された第4回石干見サミット「九州～奄美～沖縄・海垣サミット in 奄美」において、研究代表者は「よみがえる伝統漁法石干見」と題して基調講演を担当し、文化遺産の保護、継承、観光振興や地域活性化の可能性と課題点について報告した。石干見にゆかりある国内8地域の活動団体・個人が集まり、情報を交換することもできた。議論の結果、各地に存在する（存在した）石干見に関する諸記録を収集すること、そして石干見を保全し活用する活動についての記録を残さなければならないことが、喫緊の大きな課題であることが明らかとなった。そこで、2013年7月から報告集を刊行する作業を計画したところ、石干見研究者および保全・活用を進める地域の団体の代表者から合計7本の論文とレポートを得ることができた。内容は、総説として秋道智彌（総合地球環境学研究所）「石干見と里海における資源保全」上村真仁（WWF サンゴ礁保護研究センター）「日本石干見サミットの意義と可能性」「石干見」再生・活用の多面的な価値の発見」を配した。いずれも近年の石干見に関わる重要な論文である。続いて「地域からの発信」として、三輪大介（沖縄大学地域研究所）「魚垣の文化」、石垣繁（魚垣の会）「八重山・白保の「海垣」」、當田嶺男（龍郷町文化財保護審議委員会）「龍郷の「カキ漁」について」、中山春男（みんなでスクイを造ろう会）「スクイ（石干見）に思いを馳せて」の4つのレポートを得た。最後に研究代表者による解説として、「石干見の分布と地方名」を執筆した。紙数の都合上、すべての論文、レポートについてその内容を紹介することは省略するが、研究代表者の論文についてのみ簡単に触れておきたい。

石干見は、古くから存在する特徴ある漁具と認識されている。しかしながら、漁業史の中に定位されず、十分な説明さらには記録はなされてこなかった。たとえば、1895（明治28）年に完成した『日本水産捕採誌』にある簗類の項目や、第二次世界大戦前に企画され戦後に出版された『明治前日本漁業技術史』（1959）には石干見に関する記載がない。民俗学や民具学における石干見の記述も決して多いとはいえない。漁具・漁法の大分類でいえば、釣漁具や網漁具とは異なり、いわばその他の雑漁具の範疇に入るものであるが、石干見自体はきわめて大きな装置であり、漁具・漁法の規模という点だけに注目してみても記録が残されていないことが不思議なほどである。

学界においては「石干見」という表記（読みはイシヒビ）が定着しているが、なぜこの文字が使用されるのかについても、特に議論されたことはない。辞書的には、たとえば、『大辞典』（1935）に、イシヒミ（石

干見)が掲げられており、「原始的な漁法で、内灣の干潟に石を積んで垣網の如き装置にし、中央に魚溜りを作って水族を集め潮の干満を利用して獲るもの」との説明がある。しかし、石干見を『大辞典』の通りイシヒミと読んだのか、あるいはイシヒビとしたのかも現在まで特に明らかにされていない。民具学においては、民具のデータベース化の前提として標準名を整えることが課題となっており、またデータベース化が民具の広域比較を可能にするとも指摘されている。石干見の名称についてたどる根拠がこのような議論のなかにも存在している。小論では、以上のことをふまえ、文献資料や現地調査で得た聞き取り結果などに基づいて石干見の分布域とその地方名について解説した。

これら論文およびレポートは『石干見に集う 伝統漁法を守る人びと』(田和編 2014)というタイトルで2014年3月に刊行することができた。

さらに、日本各地の石干見の保全と活用については、「海と魚と人の関わり」を考え、そこに存在する地理学的知を見出すことを目的とした論文中において、「持続的漁法の保存と復元にみる海と魚と人との関係」という節を設けて考察した。具体的事例として、奄美大島の奄美市笠利町手花部に復元された石干見(ウオガキ)とミクロネシア連邦ヤップ島での石干見保全を取り上げた。

笠利町手花部では、集落の伝統や集落で自慢できるものを作り、後世に伝え残してゆくために2009年、「平成21年度奄美市紡ぐきよらの郷(しま)づくり事業」を導入し、その事業のひとつとして、石干見(ウオガキ)を復元することが計画された。2010年3月には高さ50cm以上、長さ150mにおよぶウオガキが復元された。復元の目的は、先人の文化を知らせ、伝えることであり、漁獲を得るといふ本来有する目的のためではなかった。そこで、形状は、石干見内に入った魚群が出入りしやすいように配慮され、石積みの一部を長さ約1.5mにわたって開放した形態とした。魚を獲る時には、この開放部分に袋網を敷設する。このような魚垣の形態は原型とは異なるが、これを真正な文化ではないとして否定的にみるのではなく、新たに生起された地域文化の創造としてとらえることも必要であると考える。

石干見は「待ち」の漁法であり、環境にも優しい漁法として、地域おこしや里海保全のシンボルとしても脚光を浴びてきている。ミクロネシアのヤップ島では、石干見(アッチ: aech)に入った魚をすべて獲っているわけではないという考え方が古くからある。これは、魚がアッチを安全な生息場所としているという考え方に基づいている。すなわち、魚は繰り返しアッチにやってきてはそこにとどまり、また沖に出てゆ

く。

石干見の利用法から、海を守り、魚を守る人間の知恵を読み取ることができる。同時に石干見が存在した時代を人間が最も安定的に海の幸を得てきたと安易に考えることの危険性もあることを指摘しておかなければならない。石干見はなぜ保存され、復元されるのか、石干見が環境教育や海洋レクリエーションといかなる関係を結ぶのであろうか。持続的漁法の保存と復元に託された課題は多いことも指摘しておく。

#### 4) 海外の保護団体等とのネットワークづくり

国際的な石干見研究のネットワークづくりは、今回の重要な研究課題であった。研究期間中に台湾およびフランスの研究者、石干見保護団体と情報交換し、研究の今後の方法や共同での研究活動について展望することができた。

台湾では2014年3月に実施した苗栗県後龍鎮外埔里の石滬調査の際、同地区の石滬を研究し、また管理にも関わってきた郷土史家であり苗栗県環志工講師の王君仁(ワン チーリャン)氏と情報交換することができた。王氏は、この地区に現存する2基の石滬のうち1基である合歡滬前の堤防にある展望台に設けられた説明版への情報提供者でもある。王氏からは、本地区の石滬は、もとは平埔族による構築物の可能性があることや、1980年代に周辺地域の工業化による海域汚染が石滬の数を著しく減らす結果となったことなどの貴重な情報を得た。また、王氏個人が有する研究施設を訪問し、自身の作による石滬のレプリカを使った漁業技術の原理についての説明を受け、漁業活動で実際に使用する補助漁具も見ることができた。外埔里の石滬についてのまとまった論文が掲載されている『後龍鎮誌』(2002年)を寄贈いただいた。

合歡滬の権利を有し現在もこれを使用している世話人の一人である陳俊勳氏(苗栗県後龍鎮外埔吉興宮総幹事)からも、石滬の利用と観光資源化について説明を聞いた。石滬を維持管理する組織として、「石滬資能永續維護協会」の設立を計画中であることも明らかとなった。

フランスの研究者、保護団体とのネットワークづくりは、2015年3月のシャランテ・マリタイム県オレロン島調査によって実現した。オレロン島においては、International Ancient Fishing Weirという保護団体が設立されているが、その代表であるBernard Debande氏および代表世話人のMathieu Verrat氏と情報交換した。また両氏の案内でオレロン島内に現存する17基の石干見のうち8基を調査し、漁業活動を観察することができた。両氏とは、将来的に石干見に関する国際会議を開催する方向性を探ることを約束した。

## 5) 石干見研究の可能性

研究代表者はこれまで主として小規模漁業および小規模漁業者に焦点をあて、人間環境関係に注目しながら空間利用(漁場利用)を生態学的方法によって究明してきた。そのため、石干見の利用状況をいわば共時的な空間利用という考え方の中に定位したいと考えた。事例として、現在も多く石干見が存在する世界的なセンターである台湾の澎湖列島吉貝嶼において、潮の満ち干きや月齢、季節風と関係する石滬の利用形態を生態学的視点から検討したことがある。これをふまえて、時間軸を設定して石干見の系譜論的研究、漁業史的研究を進め、また、石干見の機能と構造についてマクロな視点から回顧し、検討を加えてきた。近代期の石干見に関する史・資料を拠り所として、その当時の石干見の利用形態についても復元を試みた。こうした研究手法は、歴史的な研究の中に生態学的視点を取り入れた立場である。

伝統的な漁業文化の見直しや、沿岸域・河口域の環境保全などが注目されるなかで、石干見が存在する(存在した)地域では、すでに見てきたように、本来の漁業活動以上に、これを保存・復元したり、活用を考えたりする活動が始まっている。フランス、スペイン、台湾、韓国などでその動きがみられる。日本でも同様に九州各地で活動が始まり、2008年からは各地の自治体・関係諸団体が集い、情報を交換する「石干見サミット」が開始されていることは前述した通りである。

以上のことをふまえると、石干見研究に関して、以下のような可能性があると考えている。すなわち、すでに「研究の目的」欄に示したように、石干見研究の史的展開、石干見の名称をめぐる問題、石干見データベースの作成、石干見漁業活動の調査・研究、石干見の保存・再生・活用をめぐる議論、の5課題である。これらに関しては、2013年11月に開催された2013年人文地理学会大会(於:大阪市立大学)において、「伝統漁法石干見に関する調査研究の可能性と限界」と題して検討した。

各地での聞き取りや、石干見に関する情報交換を通じて明らかとなった、地域と地域の人々が石干見に求めるもの、あるいは石干見の位置づけと研究者側の研究の可能性は、漁業、文化遺産、観光という3つのカテゴリーの関係性として求めることができた。漁業カテゴリーは漁具・漁法として石干見がいかに使われるかという本来の意味を有する。石干見漁業の場合には、農業との関係性など複合的な生業(安室,2012)の中でとらえる必要がある。しかし、日本では文化財に指定され、自治体が管理しているものの、漁業活動がかつての所有者にゆだねられている動態保存された石干見は

長崎県諫早市北高来町水ノ浦のスクイと沖縄県宮古島市佐和田浜のカツの2基に過ぎない。2つの石干見について、現状を把握するとともに、石干見漁業活動に関する知識を得る必要がある。かつて石干見を利用した経験を有する人びとに対する聞き取り調査も緊急の課題である。

石干見を活用したいと考える地元の人々の意識には、文化財として地域の伝統を保持し、生活・生業に関する歴史遺産として保存したいという考え方、海を持続的に利用し、管理するためのいわば環境保護のシンボルとする考え方、学校教育(総合教育)の場・ツールとしたいという考え方、観光(ツーリズム)との関わりあいを求めて、町おこし・地域おこしの「素材」とするという考え方など様々であることが明らかとなってきた。このような状況について丹念に記録する作業が、石干見研究者に求められるであろう。こうした作業が、石干見の文化財選定の是非を問う基礎資料になる可能性があるし、石干見の観光資源化を進める引き金になったり、そのような動きを阻む材料になったりすることもある。

地域の行政主体や文化財保存団体、一般市民間の人的ネットワークの構築は、それぞれの地域または複数の地域にゆだねなければならないが、石干見研究者は、これらの諸団体、人々が共有できる知識を提供することによって地域の紐帯となりうるであろう。こうした諸団体や人々と互いに関係しながら何を求めればよいのか、今後とも地域との十分な情報交換と議論を続ける必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

田和正孝(2014): 漁業文化地理学とフィールドワーク. 藤田佳久・阿部和俊編『日本の経済地理学50年』,古今書院,133-143.(査読なし)

田和正孝(2013): 海域文化の地理学. 人文地理学会編『人文地理学事典』,丸善出版,308-309.(査読なし)

田和正孝(2013): 海と魚と人のかかわり 自然資源利用の実践と地理的知の行方. 池谷和信編『生き物文化の地理学』,海青社,257-276.(査読なし)

田和正孝(2013): 石干見研究を還元すること. *E-journal GEO* 8-1, 59-65.(査読有)

田和正孝(2013): 近代期の台湾における定置漁具石滬の利用と所有 1910年代の漁業権資料の分析を通じて.『漁場利用の比較研究』(国際常民文化研究叢書),国際常民文化研究機構,57-85.(査読なし)

〔学会発表〕(計2件)

田和正孝(2013.11.10): 伝統漁法石干見に関する調査研究の可能性と限界. 「2013年人文地理学会大会」, 大阪市立大学(大阪府). (一般口頭発表)

田和正孝(2013.03.23): よみがえる伝統漁法石干見. 「九州～奄美～沖縄・海垣サミット in 奄美」, 奄美市立奄美博物館(鹿児島県奄美市). (招待講演)

〔図書〕(計1件)

田和正孝編(2014)『石干見に集う 伝統漁法を守る人びと』, 関西学院大学出版会, 98p.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田和 正孝 (TAWA, Masataka)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号: 30217210